

ちがいは あるけど

なか ま
仲間だよ



ある お天気^{てん き}の 良い^よ 朝^{あさ}の ことです。青空^{あおぞら}が 広がり、そよ風^{ひろ}が 葉っぱや
草^{くさ}の 間^{あいだ}を さらさらと ふいています。カメのトラッジは、ガマ池^{いけ}の ほとりに
おりて 行きました。



「おはよう、トラッジ！」 2ひきの
トンボが^{いけ} 池^{うえ}の 上を スイスイと 飛んで
渡^{わた}った ところで、声^{こえ}を そろえて 言いました。

「おはよう、フリット！ おはよう、
フルッター！」 トラッジも、手^てを ふって
あいさつしました。

「トラッジ、どこに いるんだい？」 だれかが よんでいます。
トラッジの 親友^{しんゆう}、ネズミの ジッピーが、トラッジが 立^たっている
池^{いけ}の ほとりに 向^むかって、走^{はし}って 来^きます。
「こっちだよ。」と、トラッジ。



ジッピーがトラッジの^{ほう}方に^{はし}走り始めると、いきなり
^{あし}足が^き木の^ね根っこに^ひ引っかかってしまいました。

ドシン！ ポカン！ ドサッ！
かわいそうに、ジッピーは
^{おか}丘を^{ころ}転げ落ちて^おしまいました。

ジッピーは ドサッと ひっくり返^{かえ}って、身体中、
は 葉っぱと どろまみれに なって しまいました。



クラクラしながら すわりこんでいる 友だちの そばに、
トラッジが 急い^{いそ}いで かけつけました。

ジッピーは トラッジを 見^みて、
い 言^いいました。「その 友だち^{とも}は、だれ？」



「ぼくの 友だち^{とも}って？ 君^{きみ}の こと？」
トラッジは ふしぎそうに たずねました。
「ちがうよ、君^{きみ}と そっくりな 友だち^{とも}の こと。」

「ぼくは、^{ひとり}一人だよ。」と、トラッジ。「ジッピー、だいじょうぶかい？」
「あれ、^{いま}今は^{きみ}君だけだね。だけど、さっきは^{たし}確かに^{ふたり}二人^み見たんだ。^{きみ}君の^{とも}友だちは、
^いどこへ^い行ったんだい？」^{くち}口^{はい}に入^{くさ}った^{つち}草や土^だをはき出^いすと、ジッピーが言いました。



「^{おか}丘^{ころ}から^お転^{とき}げ落^{あたま}ちた時に、
頭^{あたま}をぶつけたんだね。」
「たぶんね。だけど、
もうだいじょうぶだよ。」

ジッピーが^た立とうとすると、
^{あしもと}足元がよろけて、またもやドサッと
^{じめん}地面に たおれてしまいました。

「なぜ、ぼくを さがしてたんかい？」
ジッピーが やっと^た^あ立ち上がると、
トラッジが たずねました。

「お母さんが、^{かあ}君を^{きみ} 朝食^{ちようしよく}に よんで いいって。
^た^こ食べに 来ない？」

「それは うれしいな！ じゃあ、タリーおばあちゃんに
^き聞いてくる。」と、トラッジ。



トラッジは、小さい時から タリーおばあちゃんと いっしょに くらしています。
 トラッジは、やさしくて めんどくさいの よい おばあちゃんが 大好きでした。



「さあ、^{いそ}急いで。^{かあ}お母さんが
 ぼくたちのことを^ま待ってるから。」
 と、ジッピー。

「^{ふたり}だけど、^{おか}あせらないで。^{ころ}二人とも、丘を 転がり
^お落ちちゃうかも しれないからね。」
 と、トラッジ。

^{ふたり}二人とも、^{おおわら}大笑いしました。

「トラッジ、メイベルさんに
ちゃんと朝食のお礼を言うのよ。」と、
タリーおばあちゃんが言いました。



「分かってるよ！」と、トラッジが答えました。



「君の背中に乗ってもいい？」と、ジッピー。

「うん、乗って。」

ジッピーはトラッジの背中にすわると、スイカズラの花を
一たばにぎって、歌を歌い始めました。



もくひょうぶつ はっけん
「目標物、発見。」
いま き
「今の、聞こえた？」と、ジッピー。
いま
「今のって？」と、トラッジ。
も ば つ とつにゆう
「持ち場に 着いて。突入！」

「また ^き聞こえた。」 そう ^い言う^いと、ジッピーは ^{まわ}あわてて ^{まわ}周りを
キョロキョロしました。「ハチの ^と飛ぶ ^{おと}音だ！」



ジッピーは ハチが ^{にが}苦手^てです。トラッジの こうらの ^{うえ}上で
^み身^みを ^かかめ、心配^{しんぱい}そうに ^め目^めを ^み見^み開^{ひら}きました。

すると とつぜん、どこからとも なく・・・ブーン！ ハチが、
ジッピーの ^{はな}鼻^な先^{さき}を ^とすごい ^{おと}スピード^すで ^と通^とり過^すぎました。

「あーっ！」 ジッピーはもうちょっとでトラッジの背^せ中^{なか}から
お落^おちそうになって、さけび^{ごえ}声^{こえ}を^あげました。

「目標^{もくひょう}、外^{はず}れ。」 ブンブン うなりを^あげながら、その声^{こえ}が
い言^いいました。「再度^{さいど}、突入^{とつにゅう}。」



そう 言^いうと、ハチは また 急降下^{きゅうこうか}してきて、ジッピーが にぎっていた
スイカズラの 1本^{いっぽん}に 着地^{ちやくち}しました。

ジッピーは キャーッと さけび^{ごえ}声^{こえ}を^あげて、スイカズラを 空^{くう}中^{ちゅう}に
な 投げました。

「走^{はし}って、トラッジ、
にげるんだ！」 ジッピーは
そう さけんで、草むら^{くさ}の中^{なか}に
さっとかくれしました。
「おそろしい ハチだよ！」



「ぼくが？ おそろしい ハチだって？ なんで そう 思^{おも}うんだい？」
きずついた 様子^{ようす}の ハチが 言^いいました。

ジッピーは 草むら^{くさ}の中^{なか}から 頭^{あたま}を出^だして 言^いいました。「だって、
ぼくの こと^{こと}を 刺^さそうと したでしょ！」



「はちみつを^{つく} 作るためにさ。」 ハチの パイロットが ^い 言いました。
「ハチは、花の ^{はな} みつを ^{つか} 使って、はちみつを ^{つく} 作るんだ。」
「ふうん。」と、ジッピーは ^い 言いましたが、まだ ^{はんしんはんぎ} 半信半疑です。

「どうして ぼくが ^{きみ} 君を ^さ 刺したいなんて ^{おも} 思うんだい？」と、ハチが ^い 言いました。
「だ、だって・・・。」 ジッピーは ^{くち} 口ごもりました。「もう、ぼくを ^{かい} 2回も ^{こうげき} 攻撃しようとしたじゃ ないか。」
「君を ^{きみ} 攻撃^{こうげき} しただって？」 そう ^い 言うと、ハチは ^{わら} 笑い出しました。「ぼくが ^だ ねらっていたのは、スイカズラだよ。君^{きみ} じゃ ない！」
ジッピーは ^ほ きょとんと しました。「どうして スイカズラが ^ほ 欲しいんだい？」

「さっきはおどかして、ごめんよ。ぼくの^{なまえ}名前は、パイロット。」と、ハチが^い言いました。

「ぼくは、ジッピー。」ジッピーも^{くさ}草むらから^で出て来ながら^い言いました。「それと、ぼくの^{とも}友だちのトラッジ。」
「やあ。」と、トラッジ。

「ぼくも、おそろしいハチだなんて^い言って、ごめんね、パイロット。さっきは^きこわかったよ。だけど、^{ほんとう}君は
本当はとってもやさしいハチなんだね。」と、ジッピー。



パイロットはクスクス^{わら}笑って^い言いました。「それはそれは、すごい^{ことば}ほめ言葉だね。
いつもの^{あつ}みつ集めで^{あた}新しい^{とも}友だちができるなんて、^{おも}思いも^ししなかったよ。」

「お母さんが^{かあ}ぼくたちを^ま待ってるんだ。^{いそ}急がなくちゃ！ また^{ちか}近い^{うち}内に^あ会おうね。」と、
ジッピーが^い言いました。



「そうだね。じゃあ、また！」
と飛び去りながら、パイロットが言いました。

「一体いつになったら帰って来るのかと思ってたわ。」と、メイベルさんが言いました。

「ただいま、お母さん。ぼくたち、新しい友だちができたんだ。パイロットって言うんだよ。パイロットは、ハチなんだ。」と、ジッピー。
「本当に？ ハチがこわいんじゃないの？」と、お母さん。

「最初はこわかったけど、今は友だちなんだ。彼はぼくとはちがうけど、彼のことが好きになったよ。」

メイベルさんはにっこりしました。
「それはすてきだわ！ 神様はわたしたちをみんな、ちがうふうにつく造られたけど、おたがいに与えられる特別なものがあるものね。」



「トラッジとジッピー」のカーニバルでのわくわくする
冒険物語も、お見のがしなく！